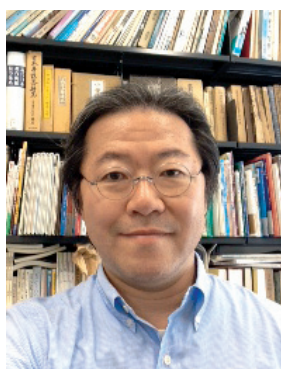




教育史における実物教育の可能性

教育学部 加藤 理



大学時代は教育学を専攻し、日本教育史のゼミに所属していましたが、他のゼミ生が先生の専門に近い藩校や寺子屋、儒学者の教育思想などについて研究する中で、いわゆる教育史の王道を研究することにあまり意味を感じることができず、子どもの遊びや読み物、おもちゃ、子どもの髪型や着物、食べていたものなど、教育史にとって裏街道ともいえる子どもの生活史を中心に調べていました。裏街道と思われた道を彷徨っていた若い頃でしたが、道草をするような時間の中で見つけたことが、現在の研究と授業の土台になっていることを感じています。(かとう おさむ)

子どもたちの歴史離れ、歴史嫌いについてしばしば耳にする昨今ですが、文教大学の学生も例外ではありません。日本史オタクと呼べそうなほど詳しい学生がいる一方で、中には学制発布や教育勅語の発布、日本国憲法の公布、教育基本法の制定といった教育史上の重要な出来事がいつ頃のことかわからない学生もたくさんいます。そうした学生たちとの教育や子どもの歴史についての学び合いの様子を紹介します。

「ジドウカン」を漢字にすると

大学で初めて授業した二十数年前のことで、学生たちに自己紹介をする中で、「これまでジドウカンの研究をしてきました」と話すと、私の自己紹介を聞いてくれていた先生がすかさず、「ジドウカンを黒板に漢字で書いてみてください」とおっしゃいました。その瞬間、私はハッとしました。自分では自明のこととして漢字で書いて学生たちに説明することなど思いもよらなかった「ジドウカン」ですが、聞いている学生にとって、ジドウカンは児童館なのか児童観なのか、わからないことに気づかされたのです。

大学での最初の授業で、お世話になった先生からいただいたこの一言は、大学の教員として授業する上で、私の大切な宝物になっています。聞いてくれている学生の理解に注意を払いながら、学生の理解に寄り添って授業

を展開していくことが大事だということを教えられたのです。

それにもかかわらず、いまだに時々学生を置き去りにして話を進めてしまうことがあります。つい先日も、一年生の授業で「ゲンコウのガクシュウシドウヨウリョウでは…」と話した後でハッとしました。そこで慌てて、「現行の学習指導要領」と板書して、「学習指導要領とは何か、聞いたことがありますか？」と聞いてみると、多くの学生たちにとってガクシュウシドウヨウリョウという言葉は初めて聞く言葉だということがわかりました。あらためて、お世話になった先生からいただいた宝物の大切さを思い起こす出来事でした。

こうしたこれまでの経験から、学生たちになじみのない出来事や人物の名前が頻繁に登場する教育と子どもの歴史について話す時は、他の授業以上に学生の理解に細心の注意を払っ

て話さなければならないと肝に銘じています。貧困な子どもたちが従事させられたコモリボウコウの話をした時、多くの学生がリアクションペーパーに「子守奉行」と大真面目に書いてきたのを見て、コモリブギョウという言葉が喚起させるイメージに思わず笑ってしまうと同時に、歴史上の出来事を一つひとつ丁寧に説明する必要性を痛感させられたものです。

実物教育への取り組み

教育の歴史に関する授業では、学生の理解に寄り添って授業を展開するために心がけていることがもう一つあります。それは、できるだけ学生たちに実物に触れてもらうことです。「実物教育」と言えるほど充実した内容にはとても及びませんが、実物教育の必要性は、研究をする中で痛感してきました。

二十年ほど前に、少年の代表的な玩具だっためんこの変遷を視点にして、子どもの遊びにみられる子ども性について考察して本にまとめたことがあります。めんこは江戸時代の泥めんこ、明治時代の鉛めんこ、そして明治中期以降の紙めんこ材質が変化していきますが、子どもたちは実にたくましく材質に応じた遊び方を生み出していきます。泥めんこは千葉近辺の畑から大量に出土し、東京でもビルを建設するために地中を掘ると出てくることがあります。紙めんこも昭和のものだけではなく明治時代のものも古い民家の蔵から出てくる場合があります。一方で、鉛めんこは戦時中の鉛の供出のためか、ほとんど現物は残っていません。博物館や資料館でも、泥めんこは展示していても、鉛めんこを展示しているところは稀です。

希少性の高い鉛めんこについて、泥めんこから鉛めんこに材質が変わると、手にした時の鉛のずっしりとした重みが子どもたちを喜ばせたと、どの先行研究を見ても書かれています。東京の羽田で出土した泥めんこを筆者も所蔵していますが、確かに泥めんこは重みがありません。初めのうち、筆者も鉛めんこの重さが子どもたちを喜ばせたのだと信じていました。

ところが、幸いにも貴重な鉛めんこを入手することができました。そして手にしてみても驚きました。先行研究が書いていたような重みを全く感じなかったからです。薄さ1ミリ、3センチ四方くらいの大きさの鉛めんこがず

しりとした重さを感じさせることはなかったのです。実物を手にして初めてわかる真実であり、鉛めんこを手にした子どもたちの気持ちに初めて寄り添うことができました。

こうした自身の経験から、学生たちには筆者が収集した実物を折に触れて手にしてもらうようにしています。江戸時代の寺子屋の教科書や明治時代から昭和にかけての自由採択制、検定時代、そして国定時代の教科書の数々。明治時代の卒業証書や明治、大正、昭和の様々な学校の卒業アルバム。あるいは、種痘をした証明書や各地に民俗文化として残る郷土玩具の数々。珍しいところでは、明治時代の通信簿や教員の辞令、義務教育が無償になる前の月謝袋などもあります。

昔の教科書や卒業アルバムなどを手にした学生たちは、和紙で作られた江戸時代の教科書の軽さに驚嘆したり、昔の生徒の落書きを見つけて喜んだりします。あるいは、卒業アルバムに書き込まれた先生たちからの贈る言葉を見て感動したりしています。辞令に書かれた昔の教員の給与と現在の教員の給与を比較しながら教員の地位の変遷を考えることもあります。

東京教育大学名誉教授で、教育史の碩学として知られた唐澤 富太郎博士は、子どもを取り巻く学校、家庭、社会生活にかかわる実物資料を通して教育の実態に迫ろうと試みたことが知られています。そのために、江戸期の寺子屋から戦後に至る100年あまりの子どもの生活文化資料を広く収集していました。

唐澤先生の足元にも及びませんが、教育と子どもの生活に関わる実物の収集を続け、これからも学生たちに実物に触れてもらいながら学びを深めてもらう授業を展開し、学生の理解に寄り添った授業を展開していきたいと思っています。



教育史実物資料